

言いやま研究の位置づけ

—主に対照言語学的な観点から—

柳 京子

はじめに

言いやま研究に関する一般の関心は他の学問研究分野に比べると、あまり高いとは言えない。この面について Edgar H. Sturtevant <1947> は次のように述べている。

(注1)

There are two large groups of linguistics facts that have until recently largely remained unrecorded. I refer to local dialects and to lapses. The former have been studied with constantly increasing energy for the last seventy years, …… Lapses have been studied by only two or three scholars and what they can contribute to the science remains for the future to show.

Sturtevant のこの言葉からも、この分野の研究がいかに遅れているかがわかるのである。

しかし、言いやま研究は Sturtevant が予見したとおり、本格的に進められるようになってから日も浅くその数も僅かであるが、今日すでに言語学および心理学にとって注目すべき一領域となっている。

Donald G. Mackay <1980> によると、将来における言いやまの研究課程は次の三つの方向で示すことができる。

(注2)

- 1) observational refinement <観測の精練>
(言いやまがどのように集められ、分析されるかについて改良する方法)
- 2) experimentation <実験>
(言いやまの性質に関する仮説を試みる方法)
- 3) theoretical integration <理論の統合>
(言いやまの理論を広げて、改良する方法)

これらの中で、本論文では3)理論の統合研究の一つの作業として、現在に至るまで言いやまが、どのように研究されてきたか、その先行研究の流れをとらえることを課題としたい。

さらに、言いやま研究の中で対照言語学をどう位置づけるべきかを検討してみる。これらの問題は、まず言いやま研究を全体的にとらえ、その本質を探るために解明しておかなければ

ばならない緊要な問題のように思われる。本論文では、言いやまり研究の全体像をとらえるべく、この問題に焦点をあわせて考察を進めていく。

言いやまりの言語学的（主に心理言語学的）研究

言いやまり研究の草分けと考えられているのは、オーストリアの言語学者である Meringer R. and Mayer K. <1895>^(注3)の Versprechen und Verlesen <言いやまりと読みあやまり>という論文である。Donald G. Mackay <1980>^(注4)によればウィーン大学の Meringer R. は、およそ 8800 例にも及ぶ言いやまりの実例——これは言いやまりのデータとしては驚くべき量である。——を収集した。彼の観測の信頼度の重要性を認識したデータ収集の方法は今日でも、大いに評価されている。彼は、テープレコーダーもなく聞き取りの条件が最良でなかったときに、誤りを間違えて記録する可能性に気づいた。可能ならば、話し手が言いやまりをしたときには、彼の記録を確かめ、言いやまりでない熟慮、すなわち、意図的なユーモアを取り除き、単純な記録や言いやまりの表面的な性格づけが考えられるときはいつでも起こる不明瞭な分類を分析するために、話し手に質問した。Meringer は、また、個々の違いと状況の効果に敏感で、不規則なところでは、年齢、性別、教育の背景、そして健康状態、話し手の中毒、あるいは疲労などを報告した。彼は、それぞれの言いやまりが起こった文脈の概要を述べ、話し手がまさしく言ったことと、彼らが言おうとしたこと、そして適切なときには、彼らが言葉の上であろうとなかろうと、聞いたり見たりしたことを遂語的に記録した。

言いやまりを記録するときに選択する可能性は完全には除かれませんが、Meringer の文献には、彼が、新しく発見された動物の種を分類する動物学者のように、言いやまりを分類することほど、彼自身の理論を確立することには、興味をもたなかったようなので、主な選択の偏見が入らなかったと信じる理由がある。そのうえ、彼は分類の枠外に出る言いやまりに特別に注意さえした。そして言いやまりの収集のとき、徹底的に話し手に質問をしたようで、Vienna 大学で、知人の間では疎まれる人物であったと言われる。（Sturtevant, 1947）

このような Meringer の創始的な研究以来、言語学者である Jespersen, O. <1922>^(注5)が言語の歴史的变化の過程と関連づけて考察を試みている。この研究は最も力を注いでいた研究課題を探究していくための一つの手掛りとして、言いやまりの現象をとりあげたが、組織的なデータの収集と分析は行われていない。

また、ロシア生まれの著名な言語学者 Jakobson, R. <1963>^(注7)は言語障害である失語症と言語学の関係について、「言語表出の障害は言語表出そのものと同様に、明らかに言語学の領域の問題であるから、失語症の“最も顕著な症状”を解く鍵は、言語学の道案内と注意深い動力なしには見出すことができないであろう。」と述べ、失語症の構音障害を言語学における音声の複合化の順序に伴う一般法則の枠内で説明し、観察し、統語過程と失文法の兆候との間に広範囲にわたる平行関係を求めようとした。

このように言いやまり研究はいくつかこなされているが、本格的な研究は 1960 年代以降にな

る。Chomsky, N. <1965>^(注8)は、" We thus make a fundametal distinction between competence <the speaker hearer's knowledge of his language > and performance <the actual use language in concrete situations>" と述べている。このようなChomskyの言語に関する知識 (linguistic competence) と言語運用 (linguistic performance) とを峻別する仮説は、言いやまりを扱った論文の立場に明確に反映されている。それは、言いやまりを分析した研究の多くが、文法研究の立場から提案された言語学的な単位や概念が言語運用のレベルにおいて実在するかどうかの検証を目的としていることによく表れている。

また、この動向にあわせて、Boomer, D. S. and Laver, I. D. M. <1968>^(注9)によるイギリス英語の研究などをはじめとして、アメリカ英語の研究が盛んに行われるようになった。これらの研究での重要な発見の一つは「言いやまりは、ランダムに起こるのではなく、言語学的に予測できる規則性のもとに生じる。」という根本的な出発点を得たことである。

言いやまり研究の中で多くの貢献をしたと評価されている Fromkin <1968>^(注10) は、competence と performance の相互関係について、performance の特定の面は、competence ほどでたらめでもなく、予見不能でもないと主張している。これは、もちろん performance のモデルが人が言うであろうことや、言語活動が起こるかもしれない言いやまりを予見できるということを示すのではなくて、むしろ、言語の performance における二つの主要な面である生成 <production> と知覚 <perception> との両方において厳密な強制があるということの意味している。また、Fromkin <1973>^(注11)によると、言いやまりの現象は、言語の歴史的变化を探る上に重要な資料とされてきたが、最近では発話生産のメカニズムを探るうえで重要な指標と考えられるようになってきた。このように、言いやまりの研究は言語の本質に関わるものとして重視されてきた。

その後、最近に至り、Shattuck <1975>^(注12) および Garrett <1975>^(注13) のような優れた研究が現れ、言いやまりの研究は理論的な発展の段階を迎えている。特に Garrett の研究は、発話のメカニズムに関する重要な仮説を提示した注目すべき労作である。それは、文法理論検証のためというよりはむしろ、言いやまり研究の内部で理論構築、批判、検討が行われ、心理言語学の一領域として発話メカニズム解明のための議論が開始されたということであろう。

言いやまりの心理学的研究—フロイト的言いやまり (Freudian slips)

言語学者とは対照的に、言いやまりの分析を心理学の立場から試みているのは Freud, S.^(注14) である。彼は精神分析学の体系において、言いやまりを意識下に働くメカニズムを反映するものとして解明しようとしている。すなわち、話しことばと直接関係のない話者の心理内容が何らかの理由で話の中に侵入して言いやまりを引き起こすのである。一つ一つの誤りそれ自体に深い心理的意味があるのであり、ことばの意味というものがいろいろ機能的に働いて、われわれに異なった誤りの形態を生じさせるのである。

Freud は Meringer と Mayer <1895>^(注16) の収集した 8800 例の話し読む場合の誤りの例を参

考にし、自らの観察によって得た事例を基にして、失語症に見られる錯語のような現象が、日常の正常人にも現われ、無意識下の抑圧を破って意識化される（実際の語に置き換えられる）という多くの例を観察し、このような事例によって、発話の形成のメカニズムがつきとめられるのではないかとの仮説を提唱した。

また、Freud < 1901 > は、「言いやまり」という形で出てくる言語障害の原因として、二つの面をとりあげている。^(注15) すなわち、ある要素が先走って出てきたりあるいは逆に後になってからもう一度出てきたりする場合、あるいはまた、言おうと思っている文章なり、文章の集まりなりが本来の形とは違った形をとることによって言いやまりが起こる場合などがこれである。例えば、Freud の娘がりんごをかじろうとして苦い顔をしたのをみると、彼は次のような句を言おうとした。Der Affe gar possierlich ist, zumal wenn er vom Apfel fießt: < 猿がりんごをかじろうとするときの顔は、とてもこっけいだ >。このとき、Affe のかわりに Apfe（実際にはない語）を使った。しかし、この語は猿 < Affe > とりんご < Apfel > の混成語のように見えると同時に、次に出てくるりんご < Apfel > の語を予期したように思われる。ところが、この場合は、最初に言ったときに娘が注意をそらしていたので、同じ句を二度目に繰り返した時に起こったもので、この凝縮化は、二度繰り返すというもどかしさのためにおこったのだと述べている。

言いやまりの言語障害の原因としてのもう一つは、その単語、文章、文章の集まりなどとは無関係な心理内容の影響によって一すなわち、本人は口に出そうとも思っていない心理内容の影響によって一起こることがあるかもしれないということである。Freud のあげている例に次のようなものがある。^(注17) ある暑い日のこと、イタリアの北東部にあるドルミテス山脈で Freud は二人のウィーンの婦人に出会い、三人は一緒に散歩しながらいろいろと語りあった。そのうち一人の婦人が次のような表現の仕方をした。

「こんなに一日中太陽のとりこになるなんて、まったく不愉快ですわ。ブラウスや・・・がびっしょりぬれるまで」このことばの中で彼女はいくらか躊躇を感じなければならなかった。彼女はここで下着類の名前をあげたかったのであるが、男の前でそのようなことばを発することを抑えた。その結果が次のような表現となってあらわれている。「でも、それから家へ帰って着替えることができますものね。」この場合、家 < nach House > と言うべきところを、nach hose: と言ってしまった。ホーゼ < Hose > はドイツ語で婦人用ズロースの意味になる。すなわち、前に言うことを抑えていた欲求が、次の全く独立した文章の中で偽装され、ことばのひずみとなって現れたと Freud は解釈している。

言いやまりの原因として以上にあげた二種類に共通する点は、妨害的に働く心理内容の受ける刺激と、言おうと思っている心理内容の受ける刺激とが同時に行われることであり、その相違は、妨害的な心理内容が外部から来るのか内部から来るのかという点である。この相違は、それほど大きなものではなく、言いやまりの心理的な説明から何か結論を引きだそうとする場合にも無視して差しつかえない。

そこで、Freud < 1901 > は、まずこの種類の言いやまりをはっきり区別することができるかどうか、また、もしそれが可能とすれば、一方の種類の言いやまりを他方の種類のそれから

区別するにはどうしたらいいかの問題を Wundt <1900>^(注18)のことばをかりて説明している。

Wundt は言語の発展法則を包括的に扱って、言いあやまりないしはこれに類似した現象の背後には必ずある種の心理的な力が働いていると考えて、次のように述べている。

「この種の心理的な力の第一は、口に出された音によって惹起される音および語の連想の不断の流れであり、これが言い間違いの積極的な原因である。更にこれに付加して現れてくる消極的な条件としては、そのような経過を阻もうとする意志の力、および、ここでもまた意志の機能として現れてくる注意力の欠如ないしは弛緩が挙げられる。上に述べた連想作用にはいろいろの種類があり、もっとあとの方で出て来るべき音が先に出てきてしまったり、あるいは逆に、すでに一度でてきた音が不必要に繰り返されたり、口癖になっている音が他の音の間にまぎれこんだり、あるいはまた、話された音とは連想関係にある全然別のことばが前者に影響を与えたり、といった場合が考えられるが、これらはすべて、連想の方向の違いないしはせいぜいのところ連想の活動範囲の相違にすぎないもので、連想の一般的な性質そのものが違っているわけではない。その上、実際の例について見ると、ある言い間違いが上に挙げた四つの形式のどれに属するかは容易に決定できない場合もあり、あるいはまた、そのような場合、原因重複の原理にしたがって（傍点著者）いくつかの動機が一緒に働いていると考えた方がむしろ真相に近いのではないかということも、軽々とは断じ難いことがある。」この Wundt のことばに、Freud は全面的に賛成し、さらに一步すすめて、言いあやまりを積極的に促進する要素—すなわち、言いあやまりを阻止するはずの注意力の弛緩—とはふつうは相協力して言いあやまりを生み出すのであり、したがって、これらの二つの要素は、同一の心理過程をただ異なった面から規定しているだけであると述べている。また、Freud は自分の集めた言いあやまりの例の中にも、ほとんどすべての場合、話そうと思っていた文章とは無関係のある何者かの妨害作用が認められるのがふつうで、その妨害的な働きをするものは、それまでは無意識の中にあっただが、言いあやまりによってはじめて意識の表面に浮び上がってきた—しかも多くの場合、くわしい分析を経てはじめて意識の面にまでぼってきた—個々の心理内容であるか、あるいはもっと一般的な話そうとしている事柄全体を否定しようとする心理的な動機なのである。

Freud が言いあやまりをほとんど精神分析の立場から説明しようとしたのは心理学者として当然のことであろう。しかし、すべての言いあやまりを Freud 的な分析だけで説明しつくすことはできない。ことばの仕組みに対して、心理がどのように関わり、どのように反応するかという面から言語学的（厳密には心理言語学的）にも分析しなければ説明できないのである。

おわりに

今まで、言いあやまり理論の統合研究の一つの作業として、現在に至るまでの言いあやまりの先行研究の流れを言いあやまりの言語学的（主に心理言語学的）研究と言いあやまりの心理学的研究—フロイト的言いあやまり(Freudian slips)—という観点から述べてきた。しかし、このような研究は主に母国語の中で起こる言いあやまり研究であって、外国語の中で起こる言いあや

まり研究はほとんどなされてないと言っても過言ではない。ここで考えなければならないのは外国語（主に対照言語学的な観点から）における言いあやまりの場合は心理学的な面よりも、言語学的な面を重視しなければならないということである。特に、中級、上級の段階で生じる言いあやまりは初級段階における間違い学習や未熟学習に起因している場合が多いこともよく知られているところである。安井稔（1981）は「対照研究の根幹を支えていると思われる母国語の干渉」ということは、確かに認めることができる^(注19)にしても、多くの場合、それは不完全な学習という概念に還元できるものであることにも注意する必要がある。母国語の干渉というと、「学習開始以前」から存在しているような印象を与えるが、そうではなく、「学習開始以後」の状態に対してのみ用いる概念であることも忘れてはならない。」とのべている。これは、前に述べた Fromkin と基本的に同じ方向で考えているとみてもよいのではないか。

したがって、対照言語学的な観点からの言いあやまり研究は、最終目標としては発話メカニズムを解明するということであるが、それは主に言語学的な観点に基づいて行われるべきであると思われる。

本論文で扱った言いあやまり研究の問題は幅が広く、奥が深い。ここではこの問題を十分にとらえきったとは考えていない。特に本論文の中でも少し触れたが言いあやまり研究の中で competence と performance の問題は非常に重視されてきた言語理論の中の一つの問題とみられるものである。今後の課題にしたいと思う。

参考文献

- 注 1) Sturtevant, E. H. <1947>, An Introduction to Linguistic Science, p. 32
New York, Yale University press.
- 注 2) Mackay, D. G. <1980> Speech Errors : Retrospect and prospect, In V.A. Fromkin <ed.> <1980> Errors in Linguistic Performance p. 319
Academic Press.
- 注 3) Meringer, R. and Mayer, K. <1896> Versprechen und Verlesen.
stuttgart : Goschensche Verlag.
- 注 4) 注 2 と同書 p. 320-321
- 注 5) 注 1 と同書
- 注 6) Jespersen, O. <1922> Language : Its Name, Development and Origin, London
Allen and Unwin.
- 注 7) Jakobson, R. 1963年にロンドンで開催された Disorders of Language に関する Ciba
Foundation によるシンポジウムに提出された報告書 「失語症の言語学的分類について」 (1976)
服部四郎編, 監訳 「失語症と言語学」 p. 103, 岩波書店
- 注 8) Chomsky, N <1965> Aspects of the Theory of Syntax., p. 4, M. I. T. press.

- 注 9) Boomer, D. S. and Laver, J. D. M. <1968> Slips of the tongue.
British Journal of Disorders of Communication, 3, pp. 1 - 12
- 注 10) Fromkin, V. A. <1968> Speculations on performance Models, J. of Ling.
4, pp. 47-68
- 注 11) Fromkin, V. A. <1973> Speech Errors as Linguistics Evidence. The Hague,
Mouton
- 注 12) Shattuck - Hunfnagel, S <1975> Speech Errors and Sentense Production. Ph.
D. Dissertation, M. I. T.
- 注 13) Garret, M. F. <1975> The analysis of sentence production.
In G. Bower <ed.> The psychology of learning and motivation
- 注 14) Freud, S. <1901> Zur Psychopathologie des Alltagslebens, Internationaler
Psychoanalytischer Verlag
「生活心理の錯誤」<1970>湊川訳, フロイト撰集第13巻, 日本教
文社
- 注 15) 注 14 と同書 pp. 73-146
- 注 16) 注 3 と同書
- 注 17) 注 14 と同書 pp. 77-78
- 注 18) Wundt, W. <1900> Völkerpsychologie, I. Band, I. Teil, s 371 u. ff
- 注 19) 安井 稔 <1981> 「対照研究の流れ」 言語 2 p. 29 大修館